

白秋アートギャラリー (25)

父と子

田中愛子

白秋がはじめて子をもったのは、大正十一年三月、白秋三七歳のときである。当時としては遅い子といえる。

白秋の婚姻歴を振り返ると、最初に暮らした女性は、隣家の人妻であった松下俊子である。彼女との恋愛に白秋は苦悩するが、最終的に一緒になり、三浦三崎へ転居する。

俊子とは一年余りで離別し、大正五年、江口章子あやこと結婚するも、同九年、家を新築するための地鎮祭の夜に章子は来客の男性と姿を消してしまう。そして、大正十年、佐藤キク(通称菊子)と婚姻し、ようやく第一子隆太郎を得る。

そんな経緯もあり、白秋にとって子を得たことは感慨ひとしおであったろう。もともと白秋が子ども、年若い者に對してやさしく愛情深い心根の人であったことは、いくつかの作品からうかがうことができる。

『雀の卵』には

鞆もちて遊ぶ子供を鞆もたぬ子供見惚るる山ざくら花
という歌があり、童謡の「雨ふり」では傘を持たずぶぬ

れになって泣いている子を見つけ、自分の傘を貸してあげようと言う。遊びや学校での一場面で「持っていない」子どもに眼を向けている。そこには憐みというより幼い子への心寄せ、いつくしみが感じられる。

また『雀の卵』の大序に、大正三年のこととして「哥路カゴといふ小犬と、黒い子鴉と村の子供たちが私の朝夕の遊び相手であった」と白秋自身が記しているように、おとなの白秋が村の子どもたちとよく遊んでいたことがわかる。そんな白秋であるから、わが子を得たよるこびはどんなにか大きかったことだろう。

水うちて赤き火星を待つ夜さや父は大き椅子に子は小
さき椅子に

『風隠集』の「火星近づく」一連四首の内の二首目である。火星大接近は大正一三年八月のことであるから、長男隆太郎はまだ二歳である。火星大接近のことは、当時も新聞などで報道されて世間の話題になっていたようだが、白秋はまだ幼い我が子に火星をじっくり見せてやろうと椅子まで用意しているのだ。そして「我は大き」ではなく「父は大き椅子」「子は小さき椅子」と詠う。さりげない描写ながら二人がまさしく親子であり、この広い宇宙の中で縁あって父と子として存在していることへの感慨がしずかに伝わってくるのだ。